

麦青きふるさと

矢島祐利 戦前歌集

( かつこ内の数字は掲載された「アララギ」の巻数、  
刊行月、通し番号を示す。見出しは編集者による。)

## 山旅

うちむかふ秩父の山に夕づく日沈まむとしていと赦きかも(17-1924-6-1)  
はるばるとわが登り来し木曾の山ただ白雲のわき立ちて見ゆ(17-8-1)

夕焼けのみ空のあかり残れば草木の緑きはやかに見ゆ(17-10-1)

### 子規先生二十三回忌歌会

赤あきつ尾花がうれにとまりつつ吹く風寒く夕暮れむとす(17-11-1)

### 牛込のしたやど

移り来て隣の寺ゆかねの音ひびかふ朝にはやなづみけり(17-12-1)  
隣なるみ寺のうちは静かなれ尺八聞ゆ月あかき夜(17-12-2)

此の寺にいま盛りなるあき萩を見む人もなくうつろはむとす(17-12-3)

町なかのみ寺のうちにひとり入り萩を眺めてこころしづけ(17-12-4)

休み日をうまあせしかば眠り足り六畳の部屋に朝日射し来も(17-12-5)

陽の照らぬ樹の下かげに咲き出でし秋海どう は小さかりけり(17-12-6)

この朝の日の光照れる樅の樹に小鳥群れ鳴く声のすがしや(17-12-7)

玻璃窓ゆふと見あぐれば樅のうれにさやかに照れり七日月かも(17-12-8)

明日はまたほがらなるべし空澄みて夕陽紅のいま沈まむとす(17-12-9)

夢悪しくさめしたまゆらふるさとの母はとおもふ朝まだきかも(17-12-10)

### 出流原の師

夕さりて紅の雲柵曳けりこの山原にわが遠く来し(18-1926-1-1)

あかき雲行方も知らに消えゆけば遠山なみは夕がすみせり(18-1-2)

月はいま出でむとすらしはろかなる山なみが上明るくなれり(18-1-3)

月よみの光さやけく照るなべにほのぼの見ゆる蕎麦のしら花(18-1-4)

月照れば石焼く煙眼にしるし立ちものぼらずなびかひにつつ(18-1-5)

短冊をあまた聯ねて吾を待ちし君がこころを思(も)へばか(こ)し(18-1-6)

師の家に友も来たりて語りひぬ俳句の話歌のことども(18-1-7)

河はらに出で立ち見れば瀬をはやみ月かけ寒く砕けけるかな(18-1-8)

河原まで友をおくりて出でて来ぬ冷たき水を掬びて飲みけり(18-1-9)

深山路に入りて自づから仰ぎ見る空の青さよこころひろけし(18-1-10)

#### 梧桐

夕暮れてしき降る雨は寂しけれ銀杏の落葉踏みて帰るも(18-2-1)

銀杏の黄葉はなべて地に敷けり夕かたまけて雨の降れれば(18-2-2)

月照るやねやの障子に梧桐の葉かけ写れりさゆらぎにつつ(18-2-3)

#### 或る時

諸人に混りて心なほ遠きこの寂しさに慣れて久しき(18-2-4)

#### 寺のかね

かきくらし雨の降れば暮れはやし灯をともさずにものをおもへり(18-4-1)

冬の日の曇りつめたくなね鳴れり隣の寺にはふりあるらし(18-4-2)

暮れはててもしともらぬ小駅に春の浅きを心ひけるかも(18-4-3)

#### 帰省

冬に入りて奥歯落ちしとふおほちは去年にかはりて面寂にけり(18-4-4)

#### 石わる音

#### 出流原

石掘ればあはれに白き山のはだ春来むかへど萌ゆる草なし(18-5-1)

まなかひは芽ぶきかすめる雑木山石灰を焼く煙たゆたふ(18-5-2)

むらざとに人ぬしづもれり山べより石破(わ)る音のひびきわたらふ(18-5-3)

あかねさす昼の光はうららかなれど村人は多くこもりてあるらし(18-5-4)

りんじ

日の暮れに熱たかまりぬうつしみは夕餉を食さずいねにけるかも(18-6-1)

夜おそく林檎を買ひて来りけるをとめをわれはしみじみと見つ(18-6-2)

日の暮れは物売りのこゑひびかへりまなこを閉ぢて我はぬにけり(18-6-3)

かぎろひの春さり来ればわかみどりがよふほどに嘆きつるかも(18-6-4)

若葉してあかるくなれるざくろ(漢字不分明)原木かげに深く息づきにけり(18-6-5)

わかぐさを籍きて坐りぬおぼなるあさき緑に心疲れて(18-6-6)

朝あけの光しみらになりぬればわがひとりあるよるこびをおもふ(18-6-7)

蚊取り線香

いちにちのおもひに疲れ立ちにける池のむこうにさつき花咲く(18-7-1)

陽の光しみらに射せば泥くさき池のにほひの立ちてのぼるも(18-7-2)

ゆく春のおもひふかしも池水のかすかにほふに我は立てれば(18-7-3)

さみだれの雨のはれまを町に出て蚊取り線香われは買ひけり(18-7-4)

雨降りてをぐらきままにひるながら蚊の啼けるこそうらさびしけれ(18-7-5)

榛名湖

山はらにたれも居らざり大きなるこゑをあげむとおもひつるかも(18-7-6)

深き霧ながるるままとときをりは白き太陽のかかれるが見ゆ(18-7-7)

深き霧草原こめてゐたりければ尾花がむれはぬれしとりたり(18-7-8)

いちめんに霧たちこめてゐたりけりさざ波立てる湖のしずかさ(18-7-9)

山上の空おもしろし霧はれて高山も見ゆ低山も見ゆ(18-7-10)

山みちにわれは立ちつつ見たりけり赤城の裾は遠く傾く(18-7-11)

渋川

蚊帳のなかに蚊のゐてわれはめざめたり前川の瀬のたぎつさびしや(18-7-12)

山みち

筑波嶺のふた峰が間(あい)の笹原は枯れがれにしてさやぎつるかも(18-8-1)

いかづちの音すさまじくとどろけばくま笹原はふるひけるかも(18-8-2)

すさまじき雨をかしこみ山なかの大杉が根にかくるひにけれ(18-8-3)

雨に濡れ赤埴道をくだりけり靴すべりつつ心さみしき(18-8-4)

雨にぬれいそぎてくだる山みちに笹のしづくの絶えまなみかも(18-8-5)

あしびきの山の夕立に濡れながら山よりおつる水飲みにけれ(18-8-6)

大川に夕汐みちてなぎにけりみなづき空の曇りよどめる(18-8-7)

にが胡瓜

覚めい出でてかすけきもの音ききて居りしまらくの間のしづかさあはれ(18-9-1)

夕膳ににがき胡瓜をはみにけりこのさびしさを知り初めしかな(18-9-2)

父と母と

幼くして別れたる父、われを育み給ひし母を念ふ二首

夢に見て泣きつることもありけるがおもふもまれになりはてにけれ(18-9-3)

生きの緒のかなしきわれを守りたまへる足乳根の母おもはざらめや(18-9-4)

此の夜ごろ天の河原澄みとほり遠田のかはづさやかなるかも(18-9-5)

下つ毛のわぎへの里に夕されば遠田の蛙ひびききこゆる(18-9-6)

かへり来て麦飯喰ひぬふるさとに此の如くして生ひ立ちにける(18-9-7)

ひさびさに地(つち)踏みにけるともしさに久しくわれはゆきもとほれり(18-9-8)

わが郷の国原ひろしさをやに唐黍（もろこし）さをぎたりにけり（18-9-9）  
狭霧降るあしたしづけし草原にそよぎの音もせざりけるかも（18-9-10）

つろこ雲

遠嶺岳に夕ぬる雲のしづけてしましがほどに色うつろひぬ（18-10-1）  
つろこ雲入り日のきはにかがよひてわが二階部屋にうすあかりせり（18-10-2）  
たたなはる夕棚雲の上にして富士の高嶺は暮れのこるなり（18-10-3）  
あさけよりほそぼそとして降る雨に何ともしもなく墨すりにけり（18-10-4）  
工廠の正午の汽笛はひびきけりあらしのなかにややかすれつつ（18-10-5）

八月某日

稚きわれに言はせしからに一と言の師の言の葉がかしこくて泣かゆ（18-10-6）  
狭（あさ）霧降る朝はしづけし草原にそよぎの音もせざりけるかも（18-10-7）

むくげ

朝はやくさやかに見ゆる富士が根をこの町なかにともしみにけり（18-11-1）  
二階部屋にしづもり居つつむくげの花ゆふべしほむをつぶさに見たり（18-11-2）  
しづかなる夕べなりけりきばちすの花はしほみてわが疲れたる（18-11-2）  
萩むらはゆふべの雨にうちしなひほぬれにいたくひぢつきにたり（18-11-3）  
朝冷えのやうやくしるききのふけふ百舌鳥の高音の身にしみにけり（18-11-4）  
生垣にはひからまれる長蔓に零余子（むかご）ここたくくるずみにけり（18-11-5）

あけび

庭隅に散りてたまれる桜葉は夕べの風にかたよりにけり（18-12-1）

二俣尾より山路飯能に遊ぶ

傾きて日射しあかるき山原に尾花はほけてなびかひにけり（18-12-2）  
しめら入る谷まの空気揺るるがに一つの鳥が高啼きにけり（18-12-3）

山道にをさなごが食みて残したる通草（あけび）の実こそあはれふかけれ（18-12-4）

陽の光しみらにとほる水浅く魚の遊びのつまびらかなり（18-12-5）

おのづから秋の色こそふかみたれ紫沓ゆるりんだうの花（18-12-6）

山峡に握り飯食ひてわがこころ一と日遊ぶをのどかと言はむ（18-12-7）

#### 水仙

もらひける水仙の花を瓶にさすいとまごころに夜ぞ更けたる（19[1926]・1-1）

あさあけのすがすがしきけれ水仙の花のかをりはかすかにきこゆ（19-1-2）

用もちて市路（いちぢ）をあゆむ夜（よる）ふかし時雨の雨は降りて来にけり（19-1-3）

川づらを吹き来る風のさむざむしくもりの空は雨をこぼしつ（19-1-4）

#### 露仏の光

#### 鎌倉長谷

向山の松の木の間に鳴きてゐるカラスの声はしはがれにたり（19-2-1）

遊びぬしわさなごも家にかへりけらし夕山かげに露仏（ろぶつ）のひかり（19-2-2）

ほのぼのと夕もやなびくをちかたに野火立ち見ゆる草焼くらしも（19-2-3）

夕原に草焼く焔たちたればわらべは声をあげて走れり（19-2-4）

戸をあけて星のさやけさを仰ぎけり竹むらさやく夜はくだちつ（19-2-5）

#### 帰郷

村ざとははやく戸ざせりかへり来て雨戸をたたく母をよびよび（19-3-1）

わが里よりまつたひらなる国原のはたてにひくし筑波の山は（19-3-2）

#### 下野大谷寺

むらがる鳩の咽喉ごゑくぐもれり山なかの寺昼たけにつつ（19-3-3）

山寺は人がげもなし庫裏に入り案内を乞へば少年が出たり（19-3-4）

#### 摩崖石仏

たたずみて銅のくらすになれぬれば岩はだ粗きみ仏の面（おも）（19-3-5）

師島木赤彦逝く

御逝去を聞きて

あかつきの床のなかにて眼をつむりしましころをおちつけにけり（19-10-1）

発行所にて

御写真つねの姿にていませどもいまはすべなし香たきまつる（19-10-2）

はふり

日の照りに眼下（ました）の湖（うみ）のかがやけばうちもだしつつ山を下りしか  
（19-10-3）

墓原にあまた萌えにし露の臺ふみくだきつつ歩みたりけり（19-10-4）

下諏訪

なまぬるき湯に入りたればうつしみの眠り足らざる眼をしばたく（19-10-5）

あさのひぐらし

窓のべの若芽もなべて葉となりぬ思ひしこともいまはすべなく（19-11-1）

毎日の仕事に慣れぬ夕されば家にかへると窓をしめをり（19-11-2）

けふ一と日なにか考えてゐたりしが夕べ疲れてわが帰るなり（19-11-3）

われここに家移りして聞きにけりあさひぐらしのこゑのとほれる（19-11-4）

こほろぎの土にあまねくナ啼くきけばこころすがしく夜をふかして（19-11-5）

いとまある今日のひるすぎのどかなり池の緋鯉の泳ぐを見つつ（19-11-6）

秋空の澄めるを見つつおもひ出づ諏訪の湖辺にわれも行きに（19-11-7）

正岡子規先生忌歌会

移り住みあさひぐらしをききにけりこの家居に未だ慣れなく（19-11-8）

毛の国の夕暮れ



冬の日はつすらに寒く射しにけりその日向にて爪をきりけり(20-3-1)

たまりける手紙を書きて心やすし冷えし茶を飲んで眠らむ(20-3-2)

幼きときの先生逝去さる

山なみに雪降り置ける毛の国の夕ぐれ時を汽車つきにけり(20-3-3)

なきながらやき場におくりわれら帰る野の上の風の寒さ沁むなり(20-3-4)

自がいのちせまると知りつ常のごと発句作りけるみこころおもふ(20-3-5)

たまさかに勤め休みてうれしけれ此の二階部屋に日あたりのよく(20-3-6)

島木赤彦一週忌歌会

たまさかに真昼湯浴めるしつこころ亡き先生を憶ひぬにけり(20[1927]-5-1)

たにし

ひさびさのおもひこそすれ田のなかに田螺しづかに動くを見つ(20-6-1)

馬を引く人ものどけし沼のべにわれらと共に歩みをとめて(20-6-2)

きざ一と田風にもまれし沼の水どろにこりして今日ぞ風きたる(20-6-3)

汽車を待ちしまらく歩くこの町は通り暗くて桜咲きたる(20-6-4)

おおちち

疲れたる眼(まなこ)にすがし池のべの藤の若葉に花咲き垂りて(20-7-1)

町なかに咲き盛りたる桐の花にほひけだるく疲るること(20-7-2)

思ふこと言ひきりしかば此の村人に憎まれにけり(20-7-3)

齒が抜けて言葉漏ると言ひながらなほおとろへずわがおほさは(20-7-4)

武州松山より吉見百穴をたづねて

けふ一と日遊ばむと来し武蔵野の吉見の村はいつかたならむ(20-8-1)

白繭をつつたかく積みてしづかなるいくつもの家並( )ぶ町なり(20-8-2)

道のべのをぐらき家も繭を煮て糸ひく人のしづかなりける(20-8-3)

騒ぎいしをさなこの去りし山かげは青葉のなかに啼く雨蛙(20-8-4)

丘の上に兵糧蔵の跡といふ地(つち)たひらなり雑木しげりて(20-8-5)

いちめんの青田のそよぎすがしきにわがたらちねの国もおもほゆ(20-8-6)

那須なる亡き師の未亡人を訪ふ

おのづからさみしき事に触れゆきて涙の顔をそむけたまへり(20-9-1)

まむかひに煙草の畑の青あをとわれも眼を其処に反らしき(20-9-2)

一年をいまだ経なくに荒れにけるみ墓の前の葛を折りつ(20-9-3)

先生のまなごけふは墓に来つ幼き姿われは目守れり(20-9-4)

たたなはる青垣山のふところの此のおくつきをうれしと言はむ(20-9-5)

母と木曾御岳に登ることありて

いただきに日射しとどきてここしけれわが行く山よ母とわが見む(20-10-1)

わが村にいくたりの人死に行きし話聞きをり山道にして(20-10-2)

深霧は谷をうづめてたひらなり高山の嶺に明け初めにつ(20-10-3)

稲刈の頃の寒さと母が言ふ高根の上よ今は下らむ(20-10-4)

家を守(も)り遠出ぬ母が汽車に乗り姥捨山も見むと言ふかも(20-10-5)

まれまれにわがたらちねと旅をすることろやさしも夜汽車のなかに(20-10-6)

年を経しおくつきのへにその母のみ墓も共に拝むけふかも(20-10-7)

木曾山中

うちわたす青草山のすがすがと此処に草鞋をはきかへなむか(20-11-1)

山深く木を伐るならむ鋸のひびきはるけし間遠に聞ゆ(20-11-2)

白雪は山あひにして消え残り真夏光にかがよひにけり(20-11-3)

たらちねよ待ちていませな白雪を谷に下りてわが採りて来む(20-11-4)

山あひに採りて来にける白雪を噛みてすがしむ汗あえながら(20-11-5)

小屋の中につごんを喰ひて居りながら山の狭霧は流れて寒し(20-11-6)  
われの言ふことつべなひて言ふ母のいたもおとなし老いにけらしな(20-11-7)

房州鋸山

年を経て昔のままにものを言ふわが友どちと今日を集へり(20-12-1)

きりぎしに身を寄せにつつのぞきを見る眼下(ました)の山に石を切りをり(20-12-2)

赤彦先生追悼歌会 於信濃国真徳寺 三首

いちめんに苔むしにける寺庭に時雨の雨は一と日降りけり(20-12-3)

十月のなかばといふにさむざむと火鉢を囲み一と日ありに(20-12-4)

うす暗き広間のなかに集れる此の国人とわれも居りにき(20-12-5)

もろともに湯槽の中にしづみつつたまさかなりと言ひし君はも(20-12-5-6)

八瀬村より比叡山に登る

まぢかくの山は紅葉に照りながらたぎつ川瀬の峽に入りつも(21-1928]-1-1)

水ぐるま動かぬままにかりをる山もと村の草枯れのいろ(21-1-2)

秋ふかき山家は粗朶を積み置きて寒さのいたる時に向かはむ(21-1-3)

徑の上を百足ながなが過りをり休めば寒き風おぼゆなり(21-1-4)

暮れかかる山を下り来る人に会はず黒き木立の峰に急がむ(21-1-5)

門につづく道は箒の目の立ちて夕暮るる寺を行きすぎにけり(21-1-6)

僧坊に一夜ねむりしあさあけのコツ火ゆゆしも大きかまどに(21-1-7)

朝の日は深山沢にとどかねばくるずみふかき杉のむらだち(21-1-8)

塚原先生逝きしときに

赤城根を吹き来る風にうちむかひ息つまるがに急ぎ行きけり(21-2-1)  
み棺を吹雪のなかにおくり来て香たく手さき寒さおぼえし(21-2-2)

長病めば糸瓜の花も散りすぎてさみしき庭にむかひいませり(21-2-3)

スチームの音

すていむの冷え来ることに気づきけり暮れゆく部屋にひとりをりつ(21-3-1)

遠くより鉄管にひびく音ありてすていむははや冷えてゆくら(21-3-2)

わがあたまた疲れてをれば部屋の灯を消して来指呼とを忘れて思ふ(21-3-3)

吉野山

桜葉はもみぢとなりて散りぬればこころしづかに吾ゆきにけり(21-5-1)

如意輪寺そこぞと見ゆるところよりいく曲りして桜の並木(21-5-3)

あづさゆみなぎ数にいと彫(彖)りし扉(と)を案内の少女ねむたげなりき(21-5-4)

右のかた竹林院にゆく路のほそぼそとして峰につづけり(21-5-5)

桜落葉かさかさ踏めば山かがし道のくまわにかくるひにけり(21-5-6)

法隆寺行

信濃路をまはり来にける冬服に汗あえにけり今日の日和を(21-7-1)

女生徒の修学旅行こみあひて金堂なかよく見えざりき(21-7-2)

夢殿はこれぞと見つるしまらくはまなこ疲れて佇みにけり(21-7-3)

なにがなし心のどかになりけらし東大門を二度くぐりたる(21-7-4)

大和国初瀬

旅を来て秋の祭にあひにけり狭き町なかにぎはひかへる(21-9-1)

もみぢせる山なかにして祭礼のさわぎとよめり遠く聞ゆる(21-9-2)

ぐみの実のつぶらにあかき下げ持てる女も共に汽車に乗りけり(21-9-3)

小豆島に遊ぶ

網をひく声のあがればめづらしく風呂をいそぎて渚に出づ(21-9-4)

かへり来て雨にこもればオリーブのみのる海へを思ふことあり(21-9-4)

しずかなる午後

地下室に水の流るる音ひびきしづかなる午後をひとり居りつこ(21-9-5)  
ひもじくて家にかへらむと思ひをり夕べの空はいまだあかるし(21-9-6)

小豆島

神懸(かんかけ)の山より下る里びとはまむしを下げて下り来わら(22[1929]-2-1)  
氷水飲み居るときも汗ながれ日に焦げしわが肌には沁む(22-2-3)

おさなし

学校の休みとなりて風ひきぬゆるびて居りしにやあらむ(22-3-1)  
少しばかり書物を買ひて帰りくる暮のちまたのにぎはひも見む(22-3-2)  
をさなごは物食ふことを習ひ初めその勢ひは何か思はしむ(22-3-3)

上野公園

子供らが色とりどりに描きをるは博物館の丸屋根なるらし(22-4-1)  
たいぼくの桜を移しをりしかば立ちて見てをり移しきるまで(22-4-2)

机の上の砂

硝子戸にあたりてはげしく吹きし風机の上に砂を落とせり(22-6-1)  
たまりける用事いくつもかたづけ疲るる如し青葉に向ふ(22-6-2)  
暖き日と寒き日とつづきゆく此のころの氣候のみだれを思ふ(22-6-3)

上野の山

泣きやまぬ子を連れ出でて見せしむるシグナルの灯の色かはりたり(22-7-1)  
図書館に始まりのかね鳴りひびき列をなしたる人等入り行く(22-7-2)  
あしたより公園の中に入居りてボールを投ぐる音のきこゆる(22-7-3)  
気づまりて寂しきときに睡蓮の花の咲きたる池を見に来つ(22-7-4)

銀座どおり

学校は暑中休暇となりしよりほしいままにしわが疲れをり(22-9-1)

ドイツより帰りし人をうち囲み銀座に来つる暑き夕がた(22-9-2)

街々のさま変りたる銀座どほり乾ききりたる埃たちつつ(22-9-3)

平泉中尊寺

山内にポンプ繕へる職人に此の寺の僧の立ちてまじれる(22-10-1)

金泥の御経を見ればいにしへにおごりしものたはむれ思ほゆ(22-10-2)

見はらしに眼鏡のくもり拭ひつつ古きいくさのことぞ思はる(22-10-3)

秀衡が栄華をきはめゐしときも百姓は苦しみて居りしにやあらむ(22-10-4)

ねずみ

きぞの夜に鼠追ひつめて殺せしが今宵もおなじところに騒ぐ(22-11-1)

この夏のひでりつつきに畑のもの何もとれぬといふ便り来ぬ(22-11-2)

山本喬をいたむ

樺太に紙をすきつつ骨折りし友は体に無理やしたらむ(22-12-1)

樺太ははや寒からむはるばるに術なくてわれは夕餉にむかふ(22-12-2)

年ごとに君が呉れたる巴巨舌のうまかりしことを言ひつる母は(22-12-3)

戦場ヶ原

高原の霧ひえびえと流れをり暑きところよりわれは来にける(23-1-1)

原なかに二分れてほそほそと一つの路は遠くつつけり(23-1-2)

草原に雨すぎしあとのこもり水流れてゆくはすがしきものを(23-1-3)

あふれゐる湯槽のなかにしづみつつ黒き濁りは何か寂しき(23-1-4)

離室よりドイツ語などの聞えをる宵はやくより眠らむと思ふ(23-1-5)

年の瀬

年の瀬のちまたを行けば路ばたに銭もちて賭をする人ありぬ(23-2-1)

このあたり街路樹もなき通りなり並ぶ建物の圧迫を感ず(23-2-2)

平福画伯洋行送別歌会

青空のイタリア国の人々に東洋の芸術を知らしめたまえ(23-2-3)

松島瑞巖寺

すがすがと白砂の路つづきたり山門を入りてとみにしづけき(23-3-1)

金華山はつはつ見ゆる高台は西行戻りといふところなり(23-3-2)

この浜にあたらしきさかな食ひにつつ七夕まつる時にあひたり(23-3-3)

飛行機

古本のオランダ文字を読まむとて虫眼鏡さがしに君は立ちたる(23-4-1)

病癒えしたより聞くさへすがすがしいささかの仕事終へたるときに(23-4-2)

いちはやく飛行機の音ききつけてをさなごは言ふ箸を置きつつ(23-4-3)

らくらくと宙返りする飛行機はつばさそろへてもろともに飛ぶ(23-4-4)

汽船

死に死にてわづかとなれる金魚鉢に今宵はすこし買ひて放たむ(23-11-1)

船に乗する約を忘れぬ子を連れて川端に行く電車をえらぶ(23-11-2)

をさなごが船の往き来に声あぐる大川口はわれも珍らし(23-11-3)

うかららと町行くこともあざりき汽船に乗りて遊山のおもひす(23-11-4)

一と夏を家にこもりし疲れあり苛立ちしまま時過ぎむとす(23-11-5)

家族の重み

山なかに自動車の道ひろびると富めるものこそ遊べるじも(24[1931]-10-1)

此の曰ころ亡き友のこと思ひ出つ共貧しくして親しみにけり(24-10-2)

早くより重き家族の圧力に堪えにし君もつひにタオレき(24-10-3)

みづうみに花火のあがるにぎはひは軌道会社の催といふ(24-10-4)

秋草のおどろが中を露に濡れ嘗て来し日は遠き思ひす(24-10-5)

いささかの仕事をもちて恋ひて来し山の宿屋は騒がしかりき(24-10-6)

横浜波止場

をさなごに海を見せむと浜に来つ外国船の泊てたるを見よ(24-11-1)

フランスの白き船こそすがしけれ子供を連れて入り行きにけり(24-11-2)

船橋(せんきょう)を渡り兼ねたるをさなごはフランスびとに抱かれにけり(24-11-3)

砂浜に捕りしやどかりはポケットに蔵ひたるまま忘れしならむ(24-11-4)

終り